「個」と「関係性」概念からのアイデンティティ尺度の作成

山田みき・岡本祐子

Developing the identity scale based on the concepts of individuality- and relatedness- based identities

Miki Yamada and Yuko Okamoto

We developed the revised Identity Scale based on the concepts of individuality- and relatedness-based identities. Two problems with the previous scale: (1) lack of acceptable validity and reliability and (2) the low discrimination between individuality and relatedness were addressed in this study by examining the item content and correlation patterns with trust. Results indicated the following. (1) Individuality based identity Scale consisted of "trust and efficacy toward the self", "future perspective" and "autonomy." (2) Relatedness based identity Scale consisted of "trust toward the world surrounding the self," "abandonment anxiety" and "location of the self in interpersonal relations." The scale was improved on the basis of these findings to reflect the mind of adolescence more closely. Using the new scale, it was possible to better discriminate between individuality based identity and relatedness based identity. Individuality based identity correlated strongly with "trust of self" and relatedness based identity correlated strongly with "trust of others".

キーワード:青年期，個としてのアイデンティティ，関係性に基づくアイデンティティ

問　題　と　目　的

1．アイデンティティを「個」と「関係性」から捉える試み

近年，アイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉え直すことが試みられている。この背景には，アイデンティティ研究において，女性や成人のアイデンティティ発達への関心の高まりから，個人としての自立が強く打ち出されてきたこれまでのアイデンティティ研究への批判が生じたことが挙げられる。また，伊藤・宮下（2004）の“関係性を求めながらも，その関係で傷つき，それを癒すために関係性を希求する”という指摘にも見られるように，現代の青少年を理解するキーワードとして関係性が取り上げられるようになり，人間発達の理解に，「関係性」の観点がより取り込まれるようになったことも関与している。

当初，「個」と「関係性」の視点は，男性と女性のアイデンティティ発達の差異を説明するものと

して捉えられていた（Hodgson & Fisher, 1979 など）。しかし，女性の社会進出など社会の変化を背景に，単に性の要因のみでアイデンティティ発達の差異を説明することへの限界が指摘され始め（Archer, 1992；杉村，1998），最近では，「個」と「関係性」は，アイデンティティを捉える性別によらない視点として認められつつある。

このような立場に立つ Franz & White（1985）は，Erikson（1950 仁科訳 1977/1980, 1967 岩瀬訳 1982）の記述を再検討し，アイデンティティ発達を“個体化経路”と“アタッチメント経路”から捉える，“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線モデル”を理論的に提唱した。このモデルでは，“個体化経路”の第Ⅰ段階から第Ⅴ段階とⅧ段階に既存の課題（第Ⅰ段階から順に，“信頼”，“自律性”，“自発性”，“勤勉性”，“アイデンティティ”，“統合性”）が設定され，第Ⅵ，Ⅶ段階には，“職業及びライフ・スタイルの模索”と“ライフ・スタイルの確立”という新たな課題が設定されている。つまり，“個体化経路”では，個人が個としての存在を確立し，社会的にも自立していく筋道が描かれている。

一方，“アタッチメント経路”では，第Ⅰ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ段階には既存の課題が設定され，第Ⅱ段階から第Ⅴ段階までは，新たな課題が設定されている。新たに設定された課題は，Mahler, Pine, & Bergman（1975 高橋・織田・浜畑訳 1981）などの分離-個体化理論や Selman（1981）の対人関係的コンピテンスに関する記述を参考にして作成されている。具体的には，第Ⅱ段階では，“対象及び自己の恒常性”が課題とされ，この時期に，個人が分離し，自律的になっていくために，愛情対象との新たなアタッチメントが形作られるとされる。ここでの新たなアタッチメントとは，母親表象へのポジティブなアタッチメント，母親表象の良い及び悪い要素の統合，現実の母親と精神内界の母親イメージがともに，快や愛情を与えてくれる状態にあることの 3 つを指す。第Ⅲ段階では，“遊戯性”が課題とされ，他者を心理的に独立した存在として認知できるようになるとされ，第Ⅳ段階では，“共感と協力”が課題となり，他者を自律的で相互依存的関係を持つ存在としてみることができるようになるとされる。第Ⅴ段階では“相互性・相互依存”が課題とされ，これ以前の段階で培われた他者存在の認識を土台に，他者との相互関係を円滑に進める種々の能力を獲得し，自己と他者の両方の感情に配慮して行動を起こすことができるとされる。そして，相互関係を築くことが可能になることが，第Ⅵ段階の“親密性”や第Ⅶ段階の“世代性”という他者との新たな形の関係の基礎になると述べられている。

Erikson が，発達における具体的他者との関係を重視しながらも，これまで十分記述し得なかった側面，つまり，他者との関係の中で個人が培う関係性に関わる特質や能力を明確化した点で，Franz & White（1985）の論考は評価される。これはまた，アイデンティティ論に「関係性」の観点を加え，より臨床心理学的にアイデンティティ概念を扱う一助にもなりうる。Franz & White（1985）の試みは，実証的な検討はなされていないものの，今後のアイデンティティ研究に新たな展開を生む重要な研究と考えられる。

本邦においても，岡本（1997，2007）が，同様の立場に立ち，成人期のアイデンティティを捉える枠組みとして，「個」と「関係性」の観点の重要性を述べている。そこでは，“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづくアイデンティティ”の 2 つの観点が提出され，それらが同等の

価値を持ち，互いに影響を及ぼしあいアイデンティティを支えているとされる。つまり，アイデンティティにおける「個」の側面と「関係性」の側面は，異なる特質を持つ発達経路を経て発達するとされ，それぞれ Franz & White（1985）の“個体化経路”と“アタッチメント経路”に相当すると考えられる。

２．「個」と「関係性」の視点からの青年期を対象としたアイデンティティ尺度の作成

上述の Franz & White（1985）の示唆を踏まえ，山田・岡本（2008）では，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉えることを試み，既存の尺度を参考に，個としてのアイデンティティ尺度（以下，個尺度と略記）と関係性に基づくアイデンティティ尺度（以下，関係性尺度と略記）を構成した。その際に採用された定義は，以下の通りである。個としてのアイデンティティとは，“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線モデル”（Franz & White, 1985）の“個体化経路”に沿って発達し，自己の能力に対する信頼感を基盤に，個を確立し独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。関係性に基づくアイデンティティとは，“Erikson 理論を応用した生涯発達に関する複線モデル”（Franz & White, 1985）の“アタッチメント経路”に沿って発達し，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つアイデンティティの側面である。

項目分析と因子分析の結果，個尺度では，「自己への信頼感・効力感」（5 項目），「将来展望」（5 項目），「自律性」（5 項目）の 3 下位因子が見出され，関係性尺度では，「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（7 項目），「他者との適度な距離感」（3 項目），「関係の中での自己の定位」（3 項目）の 3 下位因子が見出された。

しかし，山田・岡本（2008）では，関係性尺度の下位因子に信頼性係数が低いものが認められ，また個尺度と関係性尺度の弁別性に問題が残っている。この点に関して，以下に述べる関係性尺度の項目内容の改良を検討するとともに，個尺度と関係性尺度で異なる相関パターンを示すことが想定される概念との関連を検討することにより，弁別性を確認することが求められる。

項目内容について，関係性尺度の第 2 因子「他者との適度な距離感」では，他者との距離が重要であることは指摘されたが，青年期における適度な距離感とは何かという点で，説明が不十分である。「他者との適度な距離感」因子には，「私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる（逆転項目）」，「私は批判に対して敏感で傷つきやすい（逆転項目）」，「閉じこもって全く人と話をしたくなくなるときがある（逆転項目）」の 3 項目が含まれており，これらから，適度な距離感とは，見捨てられ感や取り残され感，孤独感などを表していることが推測される。

このような感覚を表す概念として，見捨てられ不安がある。見捨てられ不安とは，自分が他者から見捨てられ，関心やケアを向けられなくなるのではないかという不安である（山本，1999）。これと関連のある見捨てられ抑うつは，境界例や人格障害の特徴として挙げられることが多い。さらに，成田（1989）や東山（1998）は，青年期心性と境界例心性との類似性を指摘しており，安立（1999）などによる実証研究も重ねられている。

青年期を対象に，見捨てられ抑うつや見捨てられ不安について検討した研究の 1 つである佐々

木・小川（1994）は，青年期が第二の分離-個体化期（Blos, 1962 野沢訳 1971）とされることからも，青年期の心理を理解する上で，分離-個体化理論の中で論じられてきた見捨てられ抑うつの概念が重要であると指摘している。つまり，乳幼児期に生じる見捨てられ抑うつとは質的には異なるが，青年期にも同様の情緒が再び活性化されやすいとされる。同様の指摘が，学生相談等の青年の事例報告においていくつかなされている（山本，1989 など）。それらの多くでは，上述の境界例や人格障害との関連も含めて論じられているが，おおよそ青年の心理を反映する 1 つの概念として，見捨てられ抑うつや見捨てられ不安の重要性が述べられている。なお，山田・岡本（2008）と山田・岡本（2007）で行われた面接調査の結果から，青年の対人関係において，自他の分化の問題があることが指摘されている。自他の分化の問題は，青年期が上述の第二の分離-個体化期に当たることからも青年期に生じやすいと考えられ，そこには見捨てられ不安が関連していることも推測される。

以上のことから，山田・岡本（2008）の尺度に見捨てられ不安の要素を含めて，青年期の適度な距離感の再検討を行うことは有用であると考えられる。これはまた，Franz & White（1985）の“アタッチメント経路”の内容からも想定される。特に第Ⅱ段階の課題である“対象及び自己の恒常性”においては，対象との安定した関わりの中で，愛情対象の内的表象を発達させ，見捨てられ孤独であるという感覚を克服する。また，第Ⅴ段階の課題である“相互性・相互依存”の獲得に至るまでに，自分とは異なる他者の存在を認識し，その他者の心理を認めるという過程があり，そこには自他の区別の能力が深く関わるため，発達に伴い，見捨てられるのではないかという不安は軽減していくことも予測される。

3．本研究の目的

以上より，本研究では，①山田・岡本（2008）の尺度の改訂版を作成するとともに，②他の心理的変数との関連から，「個」と「関係性」の弁別性を検討することを目的とする。

具体的には，①では，因子分析を行い，個尺度については，山田・岡本（2008）と同様の因子構造が得られるかを確認する。関係性尺度については，山田・岡本（2008）の項目選定では削除された 1 項目，「私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある（逆転項目）」を追加し，因子内容の確認を行う。なお，妥当性の確認として，山田・岡本（2008）で用いられた同一性混乱尺度（砂田，1979），特性不安尺度（清水・今栄，1981），自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）を用いる。

②では，個尺度と関係性尺度が異なる相関パターンを示すと予想される概念として，信頼感を用いる。具体的には，天貝（1995）の信頼感尺度との相関係数を算出し，関連を検討する。本研究で信頼感を用いた理由として，以下のことが挙げられる。まず，アイデンティティ発達の基礎となる第Ⅰ段階の課題が“信頼感”とされていることからも，アイデンティティ概念と信頼感との関連は想定が可能である。自他に対する信頼感は，アイデンティティの成熟を支え，他の発達段階の心理-社会的課題に取り組む際の基礎となる。また，山田・岡本（2008）の結果，個尺度，関係性尺度ともに，第 1 因子が信頼感の要素を多分に含む因子であったことから，信頼感尺度は，両尺度とも関連があることが予想される。さらに，信頼感尺度には，“対自的信頼感”，“対他的信頼感”という信頼を向ける方向の異なる 2 因子が含まれており，“対自的信頼感”と個尺度，“対他的信頼感”と関

係性尺度がより強い相関関係にあることが予測される。

方　法

1．調査対象者・調査時期

2007 年 6 月に，2 つの大学の学生 608 名を対象に，質問紙法による調査を集団実施した。用いる尺度の数が多いため，A，B の 2 種類の質問紙を用意し，回答者数が均等になるよう配布した。分析対象は, 全体で 521 名(男性 155 名, 女性 366 名, 平均年齢 20.19 歳, *SD*=1.56)。有効回答率 85.53%。質問紙 A のみの分析対象は，264 名（男性 89 名，女性 175 名，平均年齢 20.18 歳，*SD*=1.56）。質問紙 B のみの分析対象は，256 名（男性 66 名，女性 190 名，平均年齢 20.19 歳，*SD*=1.56）。

2．質問紙の構成

以下には，本研究での分析に用いた尺度のみを記載する。

質問紙 A　個尺度（山田・岡本（2008）の 15 項目，4 件法），関係性尺度（山田・岡本（2008）の 13 項目に 1 項目加えた 14 項目，4 件法），同一性混乱尺度（砂田（1979）の 34 項目，3 件法），特性不安尺度（清水・今栄（1981）の 20 項目，4 件法），自尊感情尺度（山本・松井・山成（1982）の 10 項目，5 件法）

質問紙 B　個尺度，関係性尺度，信頼感尺度（天貝（1995）の 24 項目，6 件法）

結　果

1．因子分析

521 名分のデータを用いて，個尺度と関係性尺度それぞれについて，因子分析を行った。まず，回答の 70%以上が 1 つの回答に偏っている反応偏向項目がないかを確認したが，両尺度とも認められなかった。次に，主因子法による因子分析を行い，プロマックス回転後の因子を抽出した。固有値，スクリープロットの減衰状況，因子の解釈しやすさから，尺度を構成する因子を確定した。

個尺度では，第 1 因子「自己への信頼感・効力感」（以下，自己信頼と略記）（α=.83），第 2 因子「将来展望」（α=.80），第 3 因子「自律性」（α=.75）の 3 因子構造が得られた（Table 1）。全体の信頼性係数は α＝.84 であり，十分な信頼性が示された。

関係性尺度では，第 1 因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（以下，世界信頼と略記）（α=.86），第 2 因子「見捨てられ不安」（α=.73），第 3 因子「関係の中での自己の定位」（以下，自己定位と略記）（α=.63）の 3 因子構造が得られた（Table 2）。全体の信頼性係数は，α=.77 であり，十分な信頼性が示された。

第 2 因子では，山田・岡本（2008）で採用されていた「閉じこもって全く人と話をしたくなくなるときがある」が除外され，今回新たに加えた「私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある」が採用された。従って，因子名も「他者との適度な距離感」から「見捨てられ不安」に変更した。なお，これ以降の分析において尺度得点を算出する必要があるため，逆転項目は全て得点を逆にして分析を行った。つまり，「見捨てられ不安」因子に関しては，得点が高いほど，見捨てられ不安が低いと解釈される。

Table 1
個尺度の因子分析の結果

	F1	F2	F3	共通性
第 1 因子「自己への信頼感・効力感」（α=.83）				
私は，自分好きだし，自分に誇りをもっている	.91	-.10	-.09	.69
私は，多くのことに対して自信を持って取り組むことができる	.76	.00	.04	.61
私は，自分が役に立つ人間であると思う	.71	.09	-.10	.50
私は，きっとうまく人生を乗り越えられるであろう	.55	.13	-.10	.40
自分の考えに従って行動することに自信を持っている	.49	-.00	.27	.44
第 2 因子「将来展望」（α=.80）				
将来自分が何をしたいかという確信や目標を持っている	-.06	.75	.10	.57
将来の職業（専業主婦も含む）について，具体的に考えている	-.09	.73	.05	.49
今後，どんな風に生活していくかを考えている	.07	.71	-.08	.53
人生設計をきちんと立てて，今後の生活を送っていきたいと考えている	.04	.63	-.06	.41
私は，目的を達成しようとがんばっている	.16	.46	-.05	.29
第 3 因子「自律性」（α=.75）				
私は，自分の判断に自信がない*	.08	-.06	.74	.59
私は，誰か他の人がアイデアをだしてくれることをあてにしている*	-.20	.08	.64	.33
何かしたあとで，それが正しかったかどうか心配になることが多い*	-.02	-.13	.60	.33
私は，物事を完成させるのが苦手である*	.02	.04	.57	.34
私は，決断する力が弱い*	.19	.05	.53	.44
固有値	4.78	2.27	1.46	
寄与率(%)	31.88	15.11	9.75	
因子間相関　F1		.44	.50	
F2			.21	

注）＊　逆転項目

Table 2
関係性尺度の因子分析の結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値付け」（α=.86）				
周囲の人々によって自分が支えられていると感じる	.78	-.02	-.02	.61
これまで私が築いてきた人間関係は，私にとって価値のあるものである	.77	-.05	.08	.60
これまでに出会った人々によって，今の自分が支えられていると感じる	.73	-.11	.08	.55
私は人間関係を大事にしており，それによって多くのものを得ている	.72	.04	-.02	.51
私がこれまでに関わりをもった人々は，私によい影響を与えてくれた	.63	.11	-.10	.42
自分が困ったときには，周りの人々からの援助が期待できる	.62	-.12	.16	.40
友人関係は，比較的安定していると思う	.61	.23	-.13	.42
第2因子「見捨てられ不安」（α=.73）				
私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある*	.04	.81	-.00	.66
私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる*	.10	.74	-.01	.56
私は批判に対して敏感で傷つきやすい*	-.14	.46	.20	.34
第3因子「関係の中での自己の定位」（α=.63）				
人との集まりで他の人が私の考えに同意しないのではないかと思うと，自分の意見を主張するのにためらいを覚える*	-.05	.21	.59	.48
他者と一緒に何か物事を行うとき，私はよく受身的になってしまう*	-.07	.10	.57	.38
集団内で，私はちゅうちょすることなく，自ら正しいと思うことを表明できる	.17	-.10	.56	.32
固有値	4.02	2.56	1.20	
寄与率(%)	30.95	19.67	9.24	
因子間相関　F1		.04	.12	
F2			.42	

注）＊　逆転項目

２．妥当性の検討

構成された尺度の妥当性を検討するために，264 名分のデータを用いて，同一性混乱尺度，特性不安尺度，自尊感情尺度との相関係数を算出した（Table 3）。

同一性混乱尺度得点は，個尺度得点と r =-.59，関係性尺度得点と r =-.52 の 1%水準で有意な負の相関を示した。特性不安尺度得点も，個尺度得点と r =-.58，関係性尺度得点と r =-.52 の 1%水準で有意な負の相関を示した。自尊感情尺度得点は，個尺度得点と r =.72，関係性尺度得点と r =.46 の 1%水準で有意な正の相関を示した。自尊感情尺度との相関に関しては，個尺度では非常に強い相関が認められたが，関係性尺度では，r =.46 にとどまった。

３．「個」と「関係性」の弁別性の検討

個尺度と関係性尺度の弁別性の一部を検討するために，256 名分のデータを用いて，信頼感尺度との相関係数を算出した（Table 4）。

個尺度得点は，信頼感尺度の下位因子のうち，“対自的信頼感”と最も強い相関を示した（r =.68，p<.01）。一方，関係性尺度得点は，“対他的信頼感”と最も強い相関を示した（r =.63，p<.01）。このことより，個尺度と関係性尺度の相関パターンの違いが示され，弁別性が一部示された。

下位因子間の相関を見ると，個尺度では，全ての下位因子において，“対自的信頼感”との相関が最も高く，全て r =.40 以上の強い，もしくは非常に強い相関を示した。関係性尺度では，「世界信頼」のみが“対他的信頼感”と最も高い相関を示し（r =.60，p<.01），「見捨てられ不安」は“不信”と（r =-.48，p<.01），「自己定位」は“対自的信頼感”と（r =.37，p<.01）最も高い相関を示した。「自己定位」については，信頼感尺度のどの下位因子とも r =.40 を超える強い相関は認められなかった。

Table 3
個尺度，関係性尺度と同一性混乱尺度，特性不安尺度，自尊感情尺度との相関

	同一性混乱尺度	特性不安尺度	自尊感情尺度
個尺度得点	−.59**	−.58**	.72**
関係性尺度得点	−.52**	−.52**	.46**

Table 4
個尺度，関係性尺度と信頼感尺度との相関

	不信	対自的信頼感	対他的信頼感
自己信頼	−.17**	.61**	.31**
将来展望	−.04	.41**	.29*
自律性	−.33**	.49**	.23*
個尺度得点	−.24**	.68**	.37**
世界信頼	−.32**	.34**	.60**
見捨てられ不安	−.48**	.38**	.29**
自己定位	−.33**	.37**	.26**
関係性尺度得点	−.54**	.53**	.63**

考　察

1．個尺度と関係性尺度の改訂版の作成

因子分析の結果，個尺度，関係性尺度とも，3 因子構造が得られた。個尺度については，山田・岡本（2008）と同様の結果であり，因子構造の安定性が確認された。関係性尺度については，本研究で加えた 1 項目が採用され，新たな因子が得られた。第 1 因子，第 3 因子に関しては，山田・岡本（2008）と同様の構造であり，全体的な因子構造の安定性は確認された。

関係性尺度の第 2 因子に関しては，因子を構成する項目が変わり，山田・岡本（2008）に比べ，因子の持つ意味が明確になったと考えられる。因子の命名に関しては，改訂版においては，青年期特有の心性をより反映するために，「見捨てられ不安」という因子名を採用した。

新たに構成された「見捨てられ不安」因子は，「私は人から見捨てられたのではないかと心配になることがある（逆転項目）」，「私は時々，周囲の人や物事から取り残されて，一人ぼっちであるように感じる（逆転項目）」，「私は批判に対して敏感で傷つきやすい（逆転項目）」の 3 項目から構成されている。これらは，Franz & White（1985）の述べる第Ⅱ，Ⅴ段階の課題の対に設けられている，“孤独感と無力感”，“疎外”を反映していると考えられる。つまり，青年期のアイデンティティの関係性の側面を捉える際に，信頼や関係性の価値付け，関係の中での自己の定位と共に，見捨てられ不安を強く抱くことがないこと，すなわち，他者との関係の中で，不必要に孤独感や疎外感を感じないことが重要な要素である可能性が示唆された。これらのことからは，山田・岡本（2008）で示された「他者との適度な距離感」が，恒常性の上に成り立つ，見捨てられ不安を喚起しない他者との安定した関係と捉えられる可能性も考えられた。

改訂版尺度の妥当性検討の結果，全ての得点間で r =|.46|以上の強い相関が認められ，個尺度と関係性尺度の併存的妥当性と構成概念妥当性の一部が確認された。

2．個尺度と関係性尺度の弁別性

弁別性の検討ために行った信頼感尺度との相関分析の結果，個尺度と関係性尺度で，異なる相関パターンが示された。個尺度は，信頼感尺度の下位因子のうち“対自的信頼感”との相関が最も強く，より自己に向けた信頼の感覚と関連があることが示された。一方，関係性尺度は，“対他的信頼感”との相関が最も強く，自己外の対象に向けた信頼の感覚と関連があることが明らかになった。このことより，アイデンティティを捉える視点である「個」とは，自己に意識を向ける際に感じるアイデンティティの感覚であり，「関係性」とは，自己外の対象に意識を向ける際に感じるアイデンティティの感覚であることが考えられる。

下位因子間の相関分析の結果，個尺度では，全ての下位因子が“対自的信頼感”と最も強い相関を示し，関係性尺度では，「世界信頼」のみが“対他的信頼感”と最も強い相関を示した。「見捨てられ不安」が最も強い相関を示した“不信”因子は，項目の内容を見ると，10 項目中 2 項目が他者に対する不信であり，信頼感情や不信感情を向ける方向は自己外の対象になっている。また，“不信”因子は全て逆転項目で構成されており，同じく逆転項目で構成されている「見捨てられ不安」因子との相関が強くなったと考えられる。「自己定位」は，どの下位因子とも強い相関は認められなかったが，その中で最も強い相関を示したのは，“対自的信頼感”であった。このことから，「関係の中

での自己の定位」という側面には，他者へ向けられる意識とともに，自己に向かう意識も関連していることが示唆された。

また，妥当性の検討で行った自尊感情尺度との相関分析の結果，個尺度と関係性尺度で異なる相関パターンが認められた。関係性尺度に比べ，個尺度の方が自尊感情尺度と強い相関を示したことから，「個」としてのアイデンティティの方が，自尊感情というより個の感覚を反映する変数と強い関連を持つことが明らかになった。これも，信頼感尺度との相関分析の結果と同様，意識を向ける方向によって「個」と「関係性」が弁別されうることを示唆する結果と考えられる。

３．今後の課題

本研究では，Franz & White（1985）と岡本（1997，2007）に依拠して，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉える尺度の改訂版を作成した。因子分析の結果，山田・岡本（2008）の問題点は一部改善され，因子構造の安定性も確認された。しかし，個尺度と関係性尺度の弁別性については，本研究では信頼感との関連からのみ述べるにとどまった。本研究で，個尺度は自己に向かう意識と，関係性尺度は自己外の対象に向かう意識との関連が示されたことから，今後は，意識の向け方に着目した検討を行うこと，また，より内容的な弁別性を検討するために，信頼感以外の変数との関連を検討することが求められる。

また，本研究の結果，個尺度と関係性尺度ともに，“個体化経路”と“アタッチメント経路”の第Ⅱ段階を色濃く反映した下位因子が抽出された。これは，青年期における“自律性”や“対象及び自己の恒常性”の課題の重要性を示唆するものであり，今後，この点に焦点化してさらに検討を進めることが望まれる。それにより，学生相談等の青年支援の場において，Erikson 理論やアイデンティティ論の，より実践的な利用が可能になると考えられる。

引　用　文　献

安立奈歩　(1999).　青年期の境界例心性に関する研究　心理臨床学研究，**17**，354-365.

天貝由美子　(1995).　高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　教育心理学研究，**43**，364-371.

Archer, S. L.　(1993).　Identity in relational contexts: A methodological proposal.　In J. Kroger (Ed.), *Discussions on ego identity*.　Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum,　pp. 75-99.

Blos, P.　(1962).　*On adolescence: A psychoanalytic interpretation*.　New York: Free Press.
(ブロス, P.　野沢栄司(訳)　(1971).　青年期の精神医学　誠信書房)

Erikson, E. H.　(1950).　*Childhood and society*.　New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H.　仁科弥生(訳)　(1977/1980).　幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ　みすず書房)

Erikson, E. H.　(1967).　*Identity: Youth and crisis*.　New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H.　岩瀬庸理(訳)　(1982).　アイデンティティ —青年と危機—　金沢文庫)

Franz, C. E., & White, K. M.　(1985).　Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory.　*Journal of Personality*,　**53**,　224-256.

東山弘子　(1998).　学生相談にみる境界例　河合隼雄・成田善弘 (編)　心の科学セレクション　境

界例　日本評論社　pp. 71-87.

Hodgson, J. W., & Fisher, J. L.　(1979).　Sex differences in identity and intimacy development in college Youth.　*Journal of Youth and Adolescence*,　**8**,　37-50.

伊藤美奈子・宮下一博(編著)　(2004).　荒れる青少年の心　傷つけ傷つく青少年の心　北大路書房

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A.　(1975).　*The psychological birth of the human infant*.　New York: Basic Books.

(高橋雅士・織田正美・浜畑紀　(訳)　(1981). 乳幼児の心理的誕生　黎明書房)

成田善弘　(1989).　青年期境界例　金剛出版　pp. 22-23.

岡本祐子　(1997).　中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子　(2007).　アイデンティティ生涯発達論の展開　ミネルヴァ書房

佐々木裕子・小川俊樹　(1994).　「見捨てられ抑うつ」尺度の作成とその検討　筑波大学心理学研究，**16**，243-254.

Selman, R. L. (1981). The development of interpersonal competence: The role of understanding in conduct. *Developmental Review*,　**1**,　401-422.

清水秀美・今栄国晴　(1981).　STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究，**29**，348-353.

杉村和美　(1998).　青年期におけるアイデンティティの形成―関係性の観点からのとらえ直し―　発達心理学研究，**9**，45-55.

砂田良一　(1979).　自己像との関係からみた自我同一性　教育心理学研究，**27**，215-220.

山田みき・岡本祐子　(2007).　「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティと対人関係上の困難との関連　広島大学心理学研究，**7**，159-171.

山田みき・岡本祐子　(2008).　「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティ―対人関係の特徴の分析―　発達心理学研究，**19**，108-120.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　(1982).　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.

山本力　(1989).　見捨てられ抑うつと『守り』―青年期パーソナリティ障害の心理療法の事例検討から―　岡山県立短期大学紀要，**33**，12-18.

山本力　(1999).　見捨てられ不安　氏原寛・小川捷之・近藤邦夫・鑪幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕 (編)　カウンセリング辞典　ミネルヴァ書房　p. 594.